

夢に見られて

ロシア・ポーランドの幻想文学

沼野充義



夢に見られて

ロシア・ポーランドの幻想文学

沼野充義



作品社



沼野充義（ぬまの・みつよし）
一九五四年、東京生まれ。東京大学教養学部助教授。東京大学卒業後、八一〜八五年までフルブライトの留学生としてハーバード大学に学ぶ。八七〜八八年には、ワルシャワ大学日本語学科で講師をつとめる。著書に『屋根の上のバイリンガル』『永遠の「眠手前」』『もっと知りたいソ連』（共著）、『パロッタの愉しみ』（共著）、訳書にレム『金星応答なし』『枯草熱』（共訳）『完全な真空』（共訳）、カズエーリン『師匠たちと弟子たち』、グリーン『舞く世界』、オクジャワ『シーボフの冒険』（共訳）、編著に『ロシア怪談集』など。

夢に見られて

——ロシア・ポーランドの幻想文学

一九九〇年八月二〇日 第一刷印刷

一九九〇年八月二五日 第一刷発行

著者 沼野充義

発行者 和田肇

発行所 株式会社 作品社

東京都千代田区飯田橋二ノ七ノ四

〒三三電話（三三）二六二九七五三

FAX （三三）二六二九七五七

振替口座（東京）六二七一八三

本文印刷 図書印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 小泉製本

（落・乱丁本はお取替え致します）

夢に見られて
目次

はじめに 7

I 幻想・ユートピア・虚構

彷徨と喪神——ロシア文学におけるゴシック・ロマンスの系譜 10

ユートピア的想像力の類型学——ロシア文学の場合 35

リアリズムの虚構性から虚構のリアリティへ 50

「虚構は理性の恋人だ」 66

ロシア・モダニズムから「地下文学」へ 70

社会主義リアリズムとは何だったのか？ 74

文法の迷宮——スラヴ圏のバロック文学 87

ロシア・ポーランド幻想文学文献案内 118

II SF

ソビエトSFの展開 136

ソビエトSFの原点を求めて——伝説の二〇年代から現代へ 156

スタニスワフ・レムの世界

レムの青春 164 科学文化のボルヘス 175 序文の精神 180

孤独な想像力 184 トドロフ対レム 188

投函されなかった手紙 197 読むための年譜 199

III ロシア文学一九二〇年代

アンドレイ・ペールイと『ペテルブルグ』——霧の都でうごめく影たち

アレクサンドル・グリーンンの伝説 227

夢に見られて——ヴェニアミン・カヴェーリンの生涯と作品 244

夢のエピローグ——晩年のカヴェーリン 275

羨望の軌跡——ユーリイ・オレーシャの生涯 281

ユーリイ・オレーシャと空想文学——SF、ファンタジー、メルヘンの記憶 304

オレーシャとトルストイ——「世界を見る技術」をめぐる 315

ソビエト文学におけるドストエフスキー——オレーシャとレオーノフの場合 323

ミハイル・ブルガーコフの『巨匠とマルガリータ』

——モスクワとエルサレムの間 342

あとがき

初出一覧・索引

〔カヴァー絵〕

ミカロユス・コンスタンティナス・チュルリョーニ

ス『ノアの方舟』（一九〇九）

チュルリョーニス（一八七五—一九一一）は、リト

アニアの作曲家・画家。象徴主義的な手法で神秘と

幻想の世界を描いた。同時代のポーランドやロシア

でも高く評価されたが、精神疾患のため三十五歳の

若さで夭折した。

夢に見られて

ロシア・ポーランドの幻想文学

人が眠れば夢を見る
夢が眠れば人を見る

（バグノボリスキー）

はじめに

ロシア文学と言えばリアリズム、というのが長いあいだ常識だった。ぼく自身もロシア語を勉強し始めた学生時代には、十九世紀ロシアのリアリズム文学を理論的に支えたペリンスキーやチェルヌイシェフスキーなどのいわゆる「革命的民主主義者」の著作を読むことが、ロシア文学理解のために欠かせない基本的教養であると教えられたものだし、実際日本では多くの教師の世代にはその「当然の教養」が備わっていた。本国ソ連でも、十九世紀以来の「批判的リアリズム」の系譜は、「社会主義リアリズム」に化けてつい最近まで「唯一の正しい文学観」として君臨し続けていた。要するに、「リアルであることはいいことだ」というのがロシア文学の建前上の原則だったのである。

しかし、リアリズムというものはじつは「唯一の」ではなくて、「一つの」手法に過ぎない。フォルマリズム時代のロマン・ヤコブソンが「芸術におけるリアリズムについて」(一九二二)という論文で明快に示しているように、芸術の前衛たちはつねに「自分たちこそよりリアルである」と宣言しながら、先行する世代を乗り越えてきたのだった。当たり前のことだが、一口にリアリズムとはいっても、その意味するものは、時代によって、また流派によって違っていたのである。それにもかかわらず、ある時代、あるイデオロギーに固有の方法論を絶対視し、その方法だけが「世界を正しく描写

できる」と主張し続けるといふ行為には、なんと壮大な虚構が含まれていたことだろうか。

本書が扱うのは、このような「虚構」の言わば陰の部分で繰り広げられてきた文学的想像力の系譜である。第一部は主に十九世紀以降のロシア（部分的にはポーランド）における幻想文学やユートピア文学の流れを概観し、虚構と現実の関係をめぐる「理論的」な問題を取り扱っている。ここにはスラヴ文化圏におけるバロックという、手つかずの魅力的な領域を探ったエッセイも収められているが、ソ連ではじつはこのバロックという概念自体がリアリズム中心の文学観に合わないものとして切り捨てられ、つい最近にいたるまで無視され続けてきたのである。SFに焦点を合わせた第二部ではソビエト・ロシアSF史の点描を試み、ポーランドの作家スタニスワフ・レムに関するエッセイをあわせて収録した。第三部はロシア文学史上もつとも「幻想的」な時代の一つである一九二〇年代に活躍したアレクサンドル・グリン、ヴェニアミン・カヴェーリン、ユーリイ・オレーシャという三人の作家を中心に、その前後にベールイとブルガーコフを配することによって構成した。いずれの作家も、今世紀初頭のロシアにおける幻想のカーニヴァルを盛り上げた立役者である。

こうしてくつきりと浮かび上がってくるものが何かあるとすれば、それは「もう一つのロシア文学」の知られざる姿だろう。こう言ったからといって、なにも手品師を気取っているわけではない。「もう一つのロシア文学」——それは手さばきも鮮やかに虚空から掴み取られた花束ではない。それは常にそこに存在していたのだが、人が見ようとしなかっただけだ。それはいまも存在し続けている——優雅であること蝶のように、また重厚であること象のように、ほどほどということを知らない過激な想像力に満ち、いつも読者を眩暈と陶酔の別世界に誘おうと、それはすぐそこで待ち構えている。

I
幻想・ユートピア・虚構

彷徨と喪神

——ロシア文学におけるゴシック・ロマンスの系譜

1

ロシア文学におけるゴシック・ロマンスの系譜を考える場合、まず第一に検討しなくてはならないのは、十九世紀初頭（主として一八二〇年代から三〇年代にかけて）のロシア・ロマン主義の散文である。周知のように、西欧では十八世紀半ば頃に勃興した「ゴシック・ロマンス」がロマン主義文学の先駆けとなったわけだが、十八世紀以来西欧の文物を遅れながらも慌てて吸収してきた「後進国」ロシアにあっては、後期ロマン主義の散文の開花とゴシック的恐怖・幻想小説の流行が時期を同じくしたのだった。より厳密に言うならば、ロシアにおいてゴシック・ロマンスはロマン主義文学特有の一現象として、ロマン主義のイデオロギーの移入の後に現われたのであり、それはさらにE・T・A・ホフマンやウジェーヌ・シュエーなどのゴシック・ロマンスの血をひく西欧の作家たちの影響のもとにロシア文学の「主流」の中に深く流れ込んだのである。そのため一八四〇年代の後半にロマン主義が「万能」のリアリズムにとってかわられ、すたれてしまつてからも、ゴシック・ロマンスの精神は一部の作家の中で脈々と生き続けていた。たとえばドストエフスキーの場合だが、一八四〇年代の後半

に作家として登場した彼の初期作品の多くは「ゴシック・ロマンス的」と呼び得るものであり、彼の創作のこういった特質は後期の代表的長篇群にもはっきりと認められる。

ところが、ゴシック・ロマンスがロシア文学の中で占めるこのような重要な位置にもかかわらず、その本格的な検討はこれまでまったく言っていないほどなされてこなかった。その理由はおそらく文学史に対する基本的な姿勢、文学観にかかわるものであり、安易な一般論で簡単に説明しきれものではないだろうが、ここでは最も重要と思われる要因を二つ挙げておく。

第一に、ロシアではロマン主義にとってかわったリアリズムが万能の概念となり（万能とこで言うのは、すべての文学作品を自らの旗幟のもとに引く括れるという意味においてであり、リアリズムにはっきりとした概念規定があったわけではない）、ツルゲーネフ、ドストエフスキー、レフ・トルストイといった十九世紀ロシアの大作家たちがすべてリアリズム文学に属することになった。また二十世紀にはいつてソビエト期になると、十九世紀以来のリアリズムの伝統をもとにいわゆる社会主義リアリズムが定式化され、より強固なリアリズム一枚岩体制が築かれた。このため、リアリズムに先立つロマン主義文学を検討する際には、後のリアリズムとの連続性をもっぱら強調され、リアリズムを準備した側面ばかりが高く評価されることになり、それ以外の面——つまり、万能のリアリズムといえどもさすがに自らの枠内に収めきれなかったような面——は切り捨てられ、無視される傾向にあった。こうして、プーシキンも、ゴーゴリも、レールモントフも、リアリズムを確立するのに功績のあった文学者として規定されてきたのである。このような傾向の中では、ロマン主義をさらにさかのぼってゴシック・ロマンスの脈を探り当てようとする態度は成立しうがなかった。

第二に（もちろんこれは第一の要因と不可分の関係にあるのだが）、リアリズム、特に社会主義リアリズムはドミトリ・チジェフスキーが指摘した通り、現実を単一平面上のこととして描写しよう

とするから「唯一の」現実には別世界の息吹を持ち込むような怪奇・幻想小説は嫌われ、おとしめられた。したがってゴシック・ロマンスというジャンル自体がリアリズムの理論家からは無視される運命にあった。たとえば、現代ソビエトで最も権威のある『簡約文学百科事典』の「ゴシック小説」の項を見れば、そのことがよくわかる。このごくそっけない解説では「ゴシック小説」は、十八世紀後半から十九世紀初頭にかけて西欧やアメリカで書かれた、超自然や恐怖の描写をふんだんに取り入れた小説と説明され、ホレス・ウォルポール、アン・ラドクリフ、M・G・ルイス、シェリー夫人、マチューリン、ベックフォードといったおなじみのゴシック作家たちの名が列挙されているだけで、バイロン、スコット、バルザック、ホフマン、エドガー・アラン・ポーなどとの関係には言及があるものの、ロシアの作家の名前は一つも出てこない。

したがって、ゴシック・ロマンスの観点からロシアのロマン主義の散文を見直すということは、文学史の根本的な書きかえにも通ずる大変な作業にならざるを得ない。もちろんそのようなだいそれた作業に正面から取り組むことは拙稿の課題ではないが、以上を前置きとしてここではまず、ロシアのロマン主義の時期に見られたゴシック・ロマンスの「流行」についてごく簡単に触れたうえで、今日ほとんど読まれることのないロシアのいくつかのゴシック風小説を具体的に紹介しながら、ロシアのゴシック的風土を点描してゆくことにしたい。

*1—「Дмитрий Чижовский, History of Nineteenth-Century Russian Literature, trans. Noel Porter (Nashville, 1974), vol. 1, p. 5 を参照。

*2—*Kraskaya literaturnaya entsiklopediya*, vol. 2 (Moscow, 1964) p. 301.

ロシアのロマン主義文学は幻想小説の宝庫であり、そこには当然ゴシック的色彩の濃厚な小説も多く含まれる。この種の小説は最初に述べたような事情のため、ソビエトではかえりみられることがあまりなかったが、それでも最近では再評価の機運が高まり始めている。たとえば一九七九年にモスクワの《ナウカ》出版所が出した二巻の『ロシア文学におけるロマン主義の歴史』では、「お伽話、恐怖小説、幻想小説」に一節があてられている（この項の著者は、V・トロイツキー）。また一九八〇年にはV・I・サハロフの編によって『ロシア・ロマン主義の小説』^{ガイ・ミナ・イ}というアンソロジーが出版されたが、これまで稀にしか読まれなかったロマン派の幻想小説が数多く収められているだけに、本書の出版は画期的なことと言えるだろう。

では、ロシア・ロマン主義文学のこういった「幻想的状况」をソビエトの研究者はどう見ているのか？ サハロフは別の所で、こう書いている。

一八二〇年代から三〇年代にかけてのロシアの散文においては、幻想文学がかなり広汎に行き渡って（アントニー・ポゴレリスキー、オレスト・ソモフ、ゴゴリ、ウラジミール・オドエフスキー、ニコライ・ポレヴォイ、そしてその他の完全に忘れ去られた作家たちなど）、一種独特の流行にさえなっていたため、自分の創作の中で幻想に真面目な意味を持たせていた作家たちは嘲笑的な態度を取るようになるほどだった。

またトロイツキーは先ほど名を挙げた文学史の中で、「ロマン派の作品の中で特別な地位を占めて

いるのは、「熱狂派」小説、つまり「暗黒の」恐怖がその他の内容の上に君臨するような小説である。純粋な形ではこういった小説はロシアのロマン派の散文に特有のものではない」と言っている。ここではトロイツキーもまた外国の影響を過小評価したり、「ロシア固有のものではない」として切り捨てようとしたりする多くのロシア人の習癖をまぬがれていないようだが、それはともかくとして、ゴシック・ロマンズ、「暗黒小説」、「恐怖小説」といったジャンルが元来は西欧起源のものであることは確かだろう（しかし、「外国起源だからといってそれが本来のロシアに無縁のものだ」などという議論は成り立たない。ロシアでは西欧文学の影響を無視したら、ロマン主義自体が成立しなくなってしまうのであり、「西欧」はここではロシアによってそれほど貪婪に吸収・同化されているのだ）。実際、当時のロシアでは、バイロン、ウォルター・スコット、ホフマンなどとともに、アン・ラドクリフ、マチューリン、ベックフォードなどのゴシック作家たちが（原文よりはむしろフランス語訳やロシア語訳で）愛読されていた。

当時の証言をいくつか拾っておこう。プーシキンはマチューリンの『放浪者メルモス』を「天才的作品」と呼び、ペリンスキーはマチューリンの『アルビ派の人々』のロシア語訳が出た時（一八三五）、書評で次のように書いている。

……マチューリンは奇妙な作家だ！彼はウォルター・スコットとルイスの、そして部分的にはラドクリフとの混血児である。彼の幻想的想像力は最も現実的な生を変えて、人間と悪魔に一緒に演じられ、運命に指揮される一種の神秘劇にしてしまう。「……」マチューリンの小説を読み始めたら、読み切るまでは眠りに就くことができない。いったい彼の小説の印象を何にたとえたいのだろうか？それは重くて苦しいが、それでいて甘い——筆舌に尽くせぬほど甘美な——夢の